



少し辛口で秋田を思う

〔秋田市観光クチコミ大使〕 (株)IHI 顧問

さかき じゆん いち
榊 純 一 氏

秋田の思い出

昭和29年(1954年)に秋田市で生まれ、高校卒業までの18年間を市内で過ごしました。当時は街中でも蛍を捕まえたり、冬には小さな「かまくら」ができるくらいの雪が積もった記憶があります。娯楽はテレビが主でしたが、中学生の頃にやっと民放の2局目がUHFで開局した時代でした。

仕事のこと

会社に入ってから航空エンジンの設計部門に20数年籍を置き、その後は工業用圧縮機や遠心分離機、車両用過給機(ターボチャージャー)の事業に携わりました。圧縮機は県内でも多数が稼働中であり、その関係で秋田との行き来が増えました。会社は、別の分野で県内のベンチャー企業や大学との共同研究も実施しています。



レース前のIHIターボ搭載のフェラーリの前で(左手前)

秋田の今に思う

県内人口が百万人を割ったことで、何とか秋田の産業をもっと活性化させたいという思いを持っていますが、一方で、今ある豊かさを再認識して、住み慣れた土地で老後を穏やかに暮らしたいと思う人たちがいることも忘れてはならないと思います。

最近、興味深い話を聞きました。全国に橋梁は約70万橋ありますが、人口を単純に橋の数で割った数字を出してみると、全国平均は192人、秋田県の場合は90人で東北6県の中でも最低だそうです。この数字はいわば公共施設を支える人口を示しており、人口減少が進むと公共施設の維持が極めて難しくなることを表しています。

日本全体でもこれから人口は減っていくので、秋田だけの問題ではないのですが、秋田はその減少スピードが早いので、これを減速させるための仕組み

が必要ですし、人口減少に引きずられない県全体の「儲ける力」を増やしていくことも肝要です。

秋田の未来のために

秋田は昔から自然の資産に恵まれ、かつ自然災害も少ないことから地域循環型の経済が定着して、「地域だけで一定レベルの生活ができる」という風土が育まれてきたと感じます。変革による波風を立てず、流れに任せることはある意味心地よく、平穏な日々を過ごすことができるかもしれませんが、これは正に「ゆでガエル状態」であり、このままでは若い人たちの未来が開けてきません。一方で秋田は女性のファッションが洗練されている事や、新しいものが好きという先進的な気風もあり、他に先駆けた情報を周りに発信していくことができれば、古き良き伝統を維持しつつも新しい未来が開拓できる可能性があります。

県が今年作成した「第3期ふるさと秋田元気創造プラン」の中に『成長分野の競争力強化と中核企業の創出・育成』があり、その方向性として『競争力強化による航空機産業と自動車産業の成長促進』が示されています。幸いにこれまで航空機産業や自動車産業に携わった経験があるので、その中で得られたノウハウを若い人たちに伝えていくことは可能ですし、そのお手伝いをしたいと思っています。但し、航空機産業を育成したいと思っている都道府県は全国で35を超えており、競争相手も前へ進んでいます。「差別化できる技術」や「きらりと光る技術」を県内で是非根付かせたいものです。

■略歴

1954年	秋田県秋田市生まれ
1973年	秋田県立秋田高校卒業
1980年	東北大学大学院工学研究科修士
同 年	石川島播磨重工業(現IHI)入社 航空エンジン事業部配属
2012年	同社 執行役員 回転機械セクター長
2016年	同社 常務執行役員 車両過給機SBU長
現 在	同社 顧問